

愛されない花嫁は
初夜を一人で過ごす

リオール
Reowl

Regina
BUNKO

ロスルド

侯爵。誠実で愛情深く、
決して自分の意思を
曲げない芯の強い性格。

エリシラ

アルビナの妹、ランディの恋人。
心ではアルビナを
見下して、自分から
ハジルを誘って関係を持った。

ランディ

エリシラの恋人、侯爵令息。
アルビナの復讐の協力者。

バジル

アルビナの夫、公爵家の後継。
学園で見たかったアルビナを
結婚相手にと望んだが、
エリシラに惚れてしまい、
浮気関係となる。

アルビナ

夫と妹に裏切られた、
不遇な主人公。
お飾り妻を完璧にこなし
ハジルを支えるが、
とあることをきっかけに
復讐を決意して—!?

CHARACTERS

目次

愛されない花嫁は初夜を一人で過ごす

7

書き下ろし番外編

姉を裏切った悪女は退屈を嫌悪する

325

愛されない花嫁は初夜を一人で過ごす

第一章 裏切りには復讐を

「今、なんとおっしゃいました……?」

結婚式の夜。つまりは初夜。

聞き間違いだろうか? いや、そうであってほしい。そう切に願いながら。

私——アルビナは震えそうになる声を必死で押し殺して、愛しい旦那様となったバジル・エルディア公爵に問うた。

いつもはひとつにまとめている黒く長い髪をそのまま流したバジル様は、肩にかかるのがうつとういのか気だるげに払う。鋭くも美しい黒瞳をギラリと光らせ、端整な顔立ちは今、とても不快そうに歪^{ゆが}んでいる。

そしてバジル様は低く冷たい声で、冷淡に……冷酷に言ったのだ。

「何度も言わせるな。俺はお前を妻と思わないし、愛することもない。だからお前を抱くつもりはない。これからも未来^{みらい}永劫^{えいけつ}そのような日はこない。そう言ったのだ。理解し

たか、アルビナ?」

最後に私の名前を呼んで、しかと私の目を見据えてそう言ったバジル様は、寝台の上で呆然と座り込む私を尻目に部屋を出ていった。

私の肩から茶金の髪がサラリと流れ落ちた。輝くような金髪ならばよかったのに、と何度思ったかわからない半端に濁った髪は、けれど侍女たちの手によって美しく整えられている。

初夜のため、当然そういう行為があると侍女が用意してくれた夜着。それは真っ白で薄い下着のようなもの。裾^{すそ}はヒラヒラとしてレースがあしらわれている。肩紐はとても細い。

ズル……と肩紐がずれるのを気にする余裕もなく。

私は一人残された大きな寝台の上で放心状態のまま、日が昇るまでただただ座り続けたのだった。

* * *

バジル様の存在は知っていた。貴族が通う学園で、彼の噂をたびたび耳にしたのだ。

エルディア公爵家の後継であり、成績優秀で非常に有能。学生時代からすでに父上の片腕として働いておられ、立派に功績を残されている優秀な方。領民からも慕われており、将来は王の片腕となるであろうと言われるほどの逸材。

それが私の知るバジル様だった。

対して私とは言えば、一応侯爵家の娘ではあるものの、家族の中ではミソツカスのような存在だった。

いいえ、家族はたしかに愛してくれた。疑いようもないくらいに愛情を注いでくれた。けれど両親も、兄も姉も妹も。誰も彼もが私以外はみんな、眉目秀麗、頭脳明晰であつたのだ。

家族全員が紫紺の髪と瞳を持つ中で、私一人だけがその色を持たない。輝くような美しさを持つ家族に対し、私だけが平凡でパツとしない容姿。だけど頭脳も冴えない私を馬鹿にするような人は、家族にはいなかった。

あくまで家族の中には、の話だが。

家族以外の人間は、そのように私を甘やかすことはしない。いつだって蔑みの言葉や噂話が私の耳に届いた。

——あのように立派で美しく優秀な家系から、どうしてあんな出来損ないが生まれた

のか。

貴族からはもちろんのこと、使用人すらそう噂した。その言葉を聞いて、負けるかと奮起して——結局その努力は実を結ばず、涙したことはいったい何度あっただろうか。数えきれない。

そんな私に、バジル様との縁談話がきたときには心底驚いた。

どうしてと。なぜ私なのかと。家柄がちやうどよいと言うのなら、姉や妹がいるではないかと思った。

バジル様は私と同じ年なので、姉は年上になる。それに姉には想い合っている結婚間近の婚約者がいた。

また、私よりみつつ下の妹は年齢としてはちやうどいいが、父の親友である侯爵の令息と恋仲になっていたのだ。幼くも可愛らしい恋を邪魔すること、両親はしなかったとなれば。

婚約者がいない私に白羽の矢が立つのは、仕方ないのかもしれない。我が侯爵家の娘三人の中では、たしかに私しかなかったのだ。

しかし貴族全体で見れば、それこそ山のように条件のよい令嬢がいただろう。バジル様と結婚したいと望み、身分も容姿も知性も、何もかも問題ない……私より秀でた女性

がいるはずなのに。

『どうして私なのですか？』

不思議に思ってお父様に問う。

『バジル様が、アルビナと結婚したいとおっしゃっているんだよ。なんでも、学園で見かけて気になっていたとか』

そう言って、お父様はニツコリと微笑んだ。

驚いた、本当に心底驚いた。縁談話がきたこともだが、誰でもよいわけではなく、私だからこそ選んだということに。

十六歳から十八歳の三年間、貴族のみが通う学園は通常の勉強に社交界でのマナー、貴族としての心構えを学ぶ場だ。それとは別に、出会いの場でもある。学園で良縁があり婚約、結婚に至ったという話はザラにある。

けれど、それは自分には無縁だと思っていた。友人は大勢いたけれど、恋仲になった人も、想い人すらもいなかったのだ。

もちろん、学園で有名なバジル様を何度か見かけたことはあったが、美しい人だなど思っていただけだった。卒業するまで一度も会話したことはなく、彼の存在は私には遠すぎた。

卒業してからも恋愛にはほど遠く、浮いた話ひとつない日々。このまま生涯独身かと諦めかけていたところに、この縁談が降って湧いたのだ。

私を選んでくださったと聞いた瞬間、胸が激しく鼓動した。そのときの胸の高鳴りを忘れることはない。うれしくてうれしくて、泣きそうになって……実際、幸せで涙を流したことを覚えている。

これが恋なのかはわからない。それを判断するには、私は未熟すぎた。

ただ、そうであればいいと願う。これが恋であってほしいと望む。そうしたら、私は恋する人のもとへ嫁げるのだから。

恋に未熟で無知な私は胸を熱くさせたのだった。

それからバジル様とお会いして、正式に婚約した。それまでは、やっぱりやめると言われるのではないかとビクビクしていたけれど、無事に婚約が成立して、また泣いた。

そうして婚約から一年後、私たちは結婚したのだった。

卒業から四年が経過し、二十二歳の秋のこと。

結婚式は派手ではなかったけれど、それでも私には分不相応に美しく豪奢ごうしゃに感じられた。家族や知人の祝福を受け、私は世界で一番幸せな花嫁だと信じていた。幸せに涙した。それが昨日のこと。

——そう、まだ昨日のことなのだ。それなのに……

初夜に旦那様とどういうことをするのか知識ではわかっていたが、いざその瞬間がやってくると思ったとき、私は緊張で心臓が飛び出しそうになっていた。

夜着を着て寝台の前で旦那様——バジル様を待つ。

扉が開き、彼が入ってきた瞬間、私は頭を下げて旦那様となる方へ改めて挨拶をしようとしたのだ。

だが、下げた私の頭に降ってきたバジル様の言葉は、とても残酷なものだった。

そのまま呆然と、一夜を寝台の上で過ごした。徹夜の目には朝日が厳しく、痛い。何もやる気が起きず、私は動けない。

ただ一晩中、昨夜のバジル様の言葉を反芻^{はんそう}し続けていた。

『俺はお前を妻と思わないし、愛することもない』

——なぜ？ どうして？

では、私と結婚した意味は、どこにあるのでしょうか？

ジワリと涙が浮かぶ。うれしくて幸せに涙したのは、つい昨日のことなのに。まさかその翌日に、こんなにも悲しい涙を流すとは思わなかった。

どうすればいいのだろう……

混乱していたら、不意にノックの音がして、慌てて涙を拭う。こんな涙、誰にも見られたくないから。

返事をする、侍女の声が聞こえた。入室を許可すると、彼女はすぐに入ってきて……そして何も言わずに近づいてきた。目の下にクマを作っている私の顔は、きつとひどいものだろう。

「おはようございます、奥様。朝食の用意が整っておりますが、いかがされますか？」
そう問う彼女はわかっているのか。侍女という職務を遂行しようとする彼女の目に、今の私はどう映っているのだろう。

一切乱れない寝台。夫であるバジル様は不在。

簡単に察することができうるであろう状況を見て、彼女は何を思うのか。

けれど彼女は何も言わないし、私も何も言わない。お互いに言えるわけがない。

「まずは湯につかって身を清めたいわ。お願いできる？」

「かしこまりました。すぐにご用意いたします」

はぐらかすように要望を伝えると、侍女は頭を下げて準備を始めた。

私はそれを見やってから、窓へ顔を向ける。悲しいくらいに美しい朝の光が飛び込んできて、思わず目を細めてしまう。

侍女は非常に手際よく、テキパキと湯浴みの準備を進め、あつという間に整った。何もないうまま薄着で一晩を過ごし、冷え切った体に熱い湯はとても心地よい。

入浴を済ませれば、次は食事。正直食欲なんてないが、かといって何も食べなければ行動することはできないし、倒れてしまう。

渋々食堂へ向かった。

目の前で扉が開かれる。一步、中に入れば、そこには誰もいないことに気づく。いや、正確には給仕をはじめとした使用人たちがいる。

ただし、大きなテーブルに用意された食事は一人分しかない。考えずともわかる、これは私のためのものだ。私だけに用意された食事がポツンと、大きなテーブルにあった。つまり、私と一緒に食事をする人はいないということを意味している。

夫となったバジル様は一人息子で、彼のご両親は引退されて領内の端、遠い田舎に隠居されている。必然的にこの屋敷には、使用人を除けばバジル様と私しかない。唯一の同居人と食事すらともにできないなんて……

賑やかだった実家での食事を思い出しながら、私は小さくため息をついて席に座った。運ばれる料理は温かく、どれもおいしいものだろうと思われる。

……きつとそうなのだろう。昨夜のショックが大きかった私にはなんら味がしない。

しかし、せっかくの料理を残しては材料を育てた方々に、そして料理を作ってくれた方々に失礼だ。奪われた動物たちの命も報われない。そう教わった私は、どうにか必死で食べ進める。

食欲もないまま、無理に詰め込んだ料理は流れ作業のように私の胃に入っていった。

「ごちそうさま」

本当はおいしかったと言わなければならない。そのひと言があれば、シェフが喜ぶと私は知っている。けれど、そんな何気ない言葉を言う余裕すらない私は無言で立ち上がり、食堂をあとにした。

本来ならばそのまままっすぐ自室に戻るべきなのだろうが、そうはしない。

私は自室とは逆、目的の部屋へ向かう。

それはバジル様の部屋だ。私は昨夜の発言の意図を問うべく、バジル様の執務室へ向かった。まだ慣れない公爵邸ではあるが、夫であるバジル様がいる執務室の場所くらい、わかっている。迷うことなく立派な装飾の扉の前に立ち、一応のノックをしてから返事を待たずに扉を開けた。

「なんの用だ」

ノックはすれど、返事を待たずに扉を開けるという無礼な行為に、バジル様は眉根を

寄せる。その表情を見ずとも声だけで不機嫌丸出しだとわかる。側近がハラハラした顔をしているのが、視界の片隅に見てとれた。

バジル様から睨まれるけれど、私は臆することなく前に進み出る。そして作業をしている執務机の前、立派な椅子に座るバジル様を見下ろす形で立つ。

彼の眉間の皺しわはますます深くなる。

「執務中だぞ。出ていけ」

「用件はすぐに済みます」

バジル様は早々に私を追いつく出そうとする。

けれど、私も引けないものがあるのですと言わんばかりに、キッと睨むように見る。怒られるかと思っただけで、何も言わずにバジル様は見返してきた。負けじと私は目を逸らさない。

しばしの沈黙のあと。

私が引かないと思ったのか、諦めたようにバジル様は深々とため息をついて、側近に下がるように命じた。

扉が閉まる音がして、静寂に包まれる。部屋は私とバジル様の二人きりになった。話しやすい状況が作り上げられたのだ。

私は背筋を伸ばし勇気を振り絞るために、スウ……と大きく息を吸ってから口を開く。

「昨夜のお言葉について、お聞きしたいのです」

「話すことなど何もない」

「いいえあります。私たちは夫婦でしょう？ 話し合いはとても重要です」

その言葉に、また眉間の皺が深くなった。いったいどれだけ深まるのだろうか。

「だから俺はお前を妻と思わないと——」

「理由をお聞かせください」

バジル様の言葉を最後まで聞かないのは失礼かもしれないが、聞いてうれしい内容ではない。だから私は遮るように自分の声をかぶせた。それでお叱りを受けても、致し方ないと思いつつながら。

バジル様は虚きょをつかれたように一瞬言葉を失い、そして眉間の皺はそのままに、目を閉じて大きなため息をついた。

「私との縁談は、バジル様かあなたのご両親か……とにかく、エルディア公爵家が申し込んできたものです。姉でも妹でもなく、私をと名指ししていただいて光栄に思います。あつという間に婚約となり、それから一年後となる昨日、私たちは結婚いたしました」

そこで一度言葉を切る。

だがバジル様は何も言わない。それを確認して、私は言葉を続けた。
「だというのに、私を妻とは思わない、とはどういう意味でしょうか？ 私が気に入らないのであれば、結婚しなければよかったのに。婚約期間は一年もあったのだから、解消だってできたでしょう？　なのにどうして……」

「それに関しては、申し訳ないと思っている」

矢継ぎ早に私が述べていると、申し訳なさそうにバジル様が告げた。眉間の皺は消えている。困ったような顔をされては、なんだか私が一方的に、理不尽に責めている悪者みたいではないか。

「何か理由があるのですか？」

「それは……言えない」

その言葉に少なからず苛立ちを感じる。

「どうしてですか？ 私たちは夫婦でしょう？」

「だから、俺はお前を妻とは認めないと……」

「ではなぜ結婚したのですか！」

まったくの堂々巡りだ。なんの進展もない会話に頭が痛くなる。執務机を殴りたい衝動を必死で抑えながら、どうにか冷静を保ちつつバジル様の顔を見た。

そして、言葉を失った。

なぜ、彼は泣きそうな顔をしているのだろうか。

実際に涙は浮かんでいないけれど、今にも泣いてしまいそうな顔をしているのだ。苦しいような悲しいような寂しいような……

「バジル様……？」

理不尽なことを言われているのは私だというのに、どうして彼のほうが辛い顔をしているのか。それこそが何より理不尽だ。

「説明しないと納得できないか？」

「できません」

「それでキミが苦しむことになって何か？」

「それでも……知らないよりはマシです」

何も知らずに拒絶される。それがどれだけ悲しいことか、きっとあなたにはわからないでしょうね。

けれど優秀な家族に囲まれ、周囲からあざけりと拒絶を受け続けた私はもうこれ以上、耐えようとは思わないのだ。隠れて泣いていた子ども時代は終わった。

だから私は、真実を知る勇気を持つのだ。

「理由を教えてください」

まっすぐに見つめる私を、彼は見つめ返し、その決意を理解したのだろう。もう何度目とも知れぬため息をついて、バジル様は口を開いた。

「俺は……俺には、愛する人がいるのだ」

突然の告白に息を呑む。

それは予想外の言葉。愛する人……それが私でないことは、すぐに理解できた。

その予想は、すぐに結果として出る。

「俺は……エリシラを愛している」

そう残酷な告白を、バジル様の口から告げられたのだ。

「エリ、シラ……エリシラ……？ それは……」

「まぎれもなく、キミの妹のエリシラだ」

目の前で何かが崩れ落ちた気がした。これまで信じてきたものが、すべて崩壊していく。たしかにその音が聞こえた気がして、脚が震えた。

「エリシラには……妹には婚約者のランディがおります」

「そんなことは知っている」

絞り出した私の言葉に対し、苛立たし気なバジル様の返答。そう、彼はわかっている。

その事実を知りながらなお、エリシラを愛していると言うのか。

「俺がキミを愛せないのは、単純な片想いゆえではない」

バジル様の言葉は続く。

聞きたくないという思いが心を支配する。しかし、聞いたのはまぎれもなく私だ。苦しむことになってもよいのかとバジル様は尋ねたのに、それでも知らないよりはマシと言った。私にはバジル様の告白を最後まで聞く義務がある。

バジル様は私から視線を外すと、うつむくようにして言った。

「エリシラと俺は……しごね褥をともしたことがある」

瞬間、私は崩れ落ちた。いや、実際には体は動かず、水のごとく固まってしまっている。まるで私の足元が崩れ落ち、深い闇へ落ちる。そんな錯覚に陥ったのだ。

「我慢でできなかったのだ」

暗闇に落ちた私の耳に、バジル様のとんでもない告白は続く。見るのを拒絶するかのように、私の目の前は真っ暗だ。

「学園でキミを見かけて、結婚相手にと考えたのは本当だ。いろいろ吟味し、よく考えた結果、キミがよいと思ったのも、また事実。卒業してから婚約していいキミを、俺はたしかに伴侶はんりよとして望んだ。そのときはまぎれもなく本心から、そう思ったのだ」

だが、とバジル様は苦し気に眉根を寄せた。
「だが、キミと正式に婚約して家族との顔合わせでエリシラに初めて会った。その瞬間、心臓が高鳴るのを抑えることができなかった。あんな気持ちは初めてだった」
はあ、と出されるのは、重いため息。

「俺はこれまで誰かを愛したことがなかった。恋愛なんて、自分とは無縁のものだと思っていたんだ。愛はなくとも好意は持てたから、キミとなら平和に過ごせると思った。学園でも努力を重ねていたキミを好ましく思ったし、きつとキミとなら……そう、思ったんだ」

私の心は激しく動揺する。

好意なんて、家族でも友人でも持つ感情ではないか。父から『バジル様がアルビナと結婚したいとおっしゃっている』と聞いて、喜んでいた自分を殴りたい。

私がシヨックを受けているとも気づかずに、バジル様は淡々と残酷な言葉を続ける。

「あのときまで……エリシラと会うまでは、たしかにそう思っていた」

けれど違った。現実はそうではなかったのだ。

「俺は知らなかった。恋とはこんなにも胸を焦がすものだと、こんなにも苦しくなるものだと。俺は……知ってしまったんだ」

気づいてしまった恋心を止めることはできず、侯爵家でエリシラに会うたびに、その思いは大きくなったのだとバジル様は言う。

「キミに会いに来たというのはすべて口実で、俺はエリシラの姿をひと目見たくて、足しげく侯爵家に通った」

バジル様は頻繁に侯爵家に来ていた。それこそ私が勘違いしてしまった一番の理由だろう。私と一緒にいるとき、話しているとき、彼は私を通りすぎて、妹を見ていたというのか。なんて残酷な……あまりにも人を馬鹿にした行為に絶望を感じ……次いで怒りがわき上がるのを感じた。

知らず知らずのうちにギュッと手に力が入る。

「もちろん最初は諦めようと思ったんだ」

当たり前だが、私との婚約はすでになされている。解消できるだろうが、したところはどうなるというのか。

だって妹には……エリシラには、ランディというれっきとした婚約者がいるのだから。当時はまだ婚約前だったが、もう直前の時期。それに婚約がなされていなくとも、二人は愛し合っている。

どう望んでも、バジル様はエリシラを手に入れることはできない。

「どうしても諦められなかった。思いは増すばかりで、止めることなどできなかった」
 なぜ、そんなに……と思ってしまうのは当然だろう。

「なぜエリシラなのですか？ たしかに彼女は美しいですが、どんな子かもわからないのに。容姿の美しさで言うなら、お姉様もまた美しい人です」

「エリシラだけだ」

私の疑問にバジル様は即答する。フツと顔を上げた彼の瞳を見た瞬間、言い知れぬ何かを感じて私はゾツと身震いした。

「あんなに美しく妖艶で、俺を魅了するのは、エリシラだけだ」

妖艶？ もう十九歳になる妹は、たしかに可愛いから美しい女性に変わってきた。だがいまだ幼さの影を残す彼女には、およそ似つかわしくないその表現に、私は内心首をかしげた。

そんな私に反して、エリシラについて話すバジル様の顔は徐々に熱を帯び始める。

「エリシラは美しいだけではない、俺の心を焦がす、言い知れぬ魅力を持っている。あの瞳に見つめられるだけで俺は動けなくなるし、ずっと見てほしいとも思う。その目に俺だけを映し、誰の存在も忘れて、ただただ俺だけを——」

その目が徐々に細められ、もとより黒い瞳がますます黒くなり、濁った闇をまとう。

「知らなかった、恋とはこんなにも胸を焦がすものだ。こんなにも苦しくなるものだ。こんなにも幸せになれるものと、俺は知らなかったのだ！」

これは誰？ 目を見開き、唾を飛ばし、ただただエリシラしか視界に入らぬ眼前の男。彼はもう私の知るバジル様ではなかった。彼はいつだって落ち着いていた。公爵家当主としてトラブルに際したときも、取り乱すことはなかった。

なのにどうだ、今の彼は別人のようではないか。

「エリシラは美しい、エリシラを愛している、彼女をずっと見ていたい、自分を見てほしい」

彼は血走った目で言い続ける。

「俺は悟った、エリシラこそが俺のすべて、彼女なしの人生など無意味！ 彼女こそが俺の運命の相手であり、エリシラこそが俺と結ばれるべき伴侶なのだ！ わかるか、アルピナ！」

もうその目には私は映らない。だというのに、バジル様は私の名を呼んで私を見た。私の背後にある、誰かを見つめながら。

「いやわかるまい。恋をしたことのない、愛がなんであるかを知らないお前には、決してわかるまい、俺の思いの強さが！ 俺は生涯をかけてエリシラを愛すると誓ったの

だ。けっして彼女以外を愛することはない。俺の愛は永遠に彼女のものののだ！」
見開き血走った目を前に、私は何も言えなかった。動くことすらできなかった。

口を開いても悲鳴が喉をついただけだろう。動けたとしたら、その場にうずくまるか、走って逃げ出したらただけだろう。

だが、どちらもできない。口に手を当て、ただ涙を浮かべることしかできない私には、バジル様を前にして震えるしかなかった。

不意に糸が切れたようにバジル様が手をダランと垂らす。それまでは立ち上がって、手を上げて力説していたというのに急に力なくうなだれた。

「だがそうだな、エリシラにはランディがいる。あのときは婚約前だったが、今やれっきとした婚約者であるランディが、彼女の隣にいた」

一線を越えるなど許されるわけもなく、またそうする勇気もなかった。そうバジル様は言った。

「だがあの日、すべてが変わった」

力なくうつむいたまま、バジル様は再び語り始める。

あの日とは二ヶ月前、私とバジル様の結婚があと二ヶ月と追った日のこと。その日はバジル様が我が侯爵家で、夕食をともにした日だった。

娘が嫁ぐことに少なからぬ悲しみを持つのは、大抵の父親の共通点だろう。そんな父がバジル様に結構な量の酒を勧めたのは仕方なかったのかもしれない。

そして、バジル様はバジル様でエリシラへの思いに苦しみ続ける日々ゆえの精神的疲労からか、いつも以上に酒が進み、かなり酔った。

結果、彼はその日は公爵邸に帰らず、侯爵家に泊まることとなった。

——初めての過ちはその日の夜に起こる。

みんなが寝静まった深夜、喉の渴きを覚えたバジル様はふと目を覚ました。

その瞬間、彼は誰かが暗闇の中、自分の上に覆いかぶさっているのに気づく。

まさか賊か!? と慌てたものの、酒が残っていて満足に動けない。焦る一方で体は思うように動かず、簡単に押さえ込まれてしまった。

そして、バジル様が身を固くした直後。

『しー。お静かに』

突如、覆いかぶさる影が声を出す。

耳元で囁く聞き覚えのある声。それは忘れようがない、間違えようがないもの。

恋焦がれた人の声が耳をつく。

雲が切れて月明かりが室内を照らし、一糸^{いっし}まとわぬ姿で、自分に覆いかぶさるエリシ

ラの姿をバジル様は目にした。そして瞬きひとつせず、その白く美しい肌を見つめ続けたのだ。

「俺はそのとき、初めてエリシラを抱いた」

流れるようにそう言うバジル様の目は恍惚こうことしていた。きっと彼の脳裏には、そのときのエリシラの姿が浮かんでいるのだろう。

「初めて、ですか……」

その言葉の意味するところ。それはつまり……

「そうだ、初めてだ。それからはもう止まらなかった」

二人の関係は、一夜の過ちで終わらない。それから何度もエリシラとバジル様は関係を持った。

私との結婚まであと数日という限られた時間が、余計に二人に火をつけたのか。時に屋敷内で昼間から、私が席を外したほんの短時間。侯爵家に泊まったときは一晩中。さらに、外での逢瀬も繰り返したという。

それを聞いても、私は何も言わなかった。正確には言えなかった。

何を言えというのだろうか？

私と結婚の話を進めているながら、ずっと彼は妹と関係を持っていたのだ。そんな事実

を知らされて、何を言えばよいのか。

しかし何も言わなければ、バジル様はまだ話し続けるだろう。聞きたくもない妹との赤裸せきらく々な関係を延々と聞かされる。

それを悟った私はそんな地獄に身を投じるつもりはないと、彼の言葉を遮るように重い口を動かす。

「これから、どうするつもりなのですか？」

それだけ問う。

これまでのことはよくわかった。彼がエリシラを愛していることも、嫌というほど理解した。ただその先に彼は何を求めるのか、どうするつもりなのか。それを明確にしてくて聞いた。

すると彼はフツと黙り込んで、私を見る。その目にはすでに濁った闇の色はない。この切り替えの速さがあるからこそ、これまで私に隠し通せたのだろう。

「今後のことが」

すべてを話して心が軽くなったからか、バジル様の顔は妙にスッキリしている。

「何度も言うように、俺はキミを妻とは思わない。だが離婚もしない」

「なぜですか？」

「俺には公爵としての立場がある。そもそもエリシラと結ばれないのだから、キミと離婚する意味はない。キミにはこのまま公爵夫人でいてほしい」

彼は残酷な言葉を言い続ける。

「そんな……」

「悪い話ではあるまい？ キミは俺と婚約するまで、誰とも縁談はなかったそうじゃないか。そんなキミが離婚してみろ、もう二度と結婚できない。一生独り身でどうする気だ？ 実家に寄生する気か？」

「……」

悔しいかな、その言葉に反論できなかった。

それを是ととったのだろう、バジル様はうなずいてピツと人差し指を立てると、「今後のルールはこうだ」と言った。

- ・ けつして体を重ねることはしない。
- ・ 相手に愛を求めない。
- ・ 公おおぎの場では仲のよい夫婦を演じる。
- ・ 子どもはできなかったことにして、三年後くらいに養子を迎える。

なんと横暴で身勝手なルールだろう。そこには私の意思も希望も反映されていない。「このことは誰にも話すな。話したところで、何もいいことなどないからな。互いの平穩のためだ」

互いの？ いいえ、私に平穩なんてありはしない。穏やかな日々を望んでの結婚だったけれど、それは無惨にも打ち砕かれたのだ。もう平穩などどこにもない。

「……わかりました」

だが、今の私では何も言えなかった。何もできない。腸はわたが煮えくり返るような怒りを内に抱えながら、それでも私には彼を罵ののることができなかった。

なんて、情けない……

それからバジル様と何を話して、どのタイミングで退室し、どうやって部屋に戻ったか覚えていない。

気づけば私は自室へ戻り、椅子に座って呆然としていた。侍女はおらず、一人きりの空間。窓の外には目を向けるのが苦しくなるほど美しい青空が広がっている。耳触りのよい鳥のさえずりに、心地よい風の音が聞こえてくる。

まるで何も憂うことのないような景色から私は目をそむける。うつむくと、自分の影

で暗くなったテーブルが瞳に映った。それをしばし見つめて……直後。

——ドンツ。

私は目の前のテーブルを荒々しく殴って、額ひたいを天板につけた。目を閉じると、先ほどのバジル様の言葉が脳裏で繰り返される。

『俺は……キミの妹であるエリシラを愛している』

『俺は生涯をかけてエリシラを愛すると誓ったのだ』

『キミを妻とは思わない』

私は説明してもらわないと納得できないと言った。けれど真実を知った今、納得できただろうか？

「いいえ。到底納得できないわ」

裏で二人が何をしているか知りもせずに、私はバジル様との結婚に浮かれた。エリシラが心から祝福してくれていると思ひ込み、彼女に惚うろけていたのだ。

天井を仰ぎ見る。気分是最悪で、不快感に包まれ気持ち悪い。先ほど食べた食事を戻してしまいたい。何をする気力も起きないまま、放心状態が続く。

静寂の中で聞こえてくる鳥の声は遠い。

少しだけ開いた窓から流れ込む風が私の髪を揺らした。金の輝きを望んだ髪は茶色を

濃くするだけで、明るさを増すことはない。なんて美しくない茶金の髪。

瞼まぶたを閉じて思い出すのは、妹の美しい髪と瞳の紫紺の色。整った顔立ちに、白く綺麗きれいで透き通るような肌。愛らしい形の唇。美しい妹の顔。

バジル様の話は本当なのか、という疑問はある。彼がエリシラに惚れているのは真実だろう。私に話す彼の目は本気だった。あの血走った目が演技などとは到底思えない。

けれど、ではエリシラは？

少なくとも私が知るエリシラは婚約者——幼馴染の侯爵令息ランディにぞっこんだ。彼が私や長姉と話すことすら妬やまほど、エリシラはランディを好いている。

それに何より私たち姉妹の関係は良好だ。喧嘩なんてした記憶もない。年の離れた兄姉より、エリシラは歳の近い私と最も仲がよかった。

『おめでとう、アルビナお姉様！』

そう言っ、私の結婚を誰より喜んでくれたのだ。

そんなエリシラが自分からバジル様を誘うだろうか？ 何度も体を重ねるなんてこと、ありえるだろうか？

——まったく想像できない。

そもそも想像したくない。でも私が知らないだけで、妹には隠された一面があるのか

もしれない。いくら家族でも知らないことだってあるはず。それこそ、成長とともに秘密は増えるはず。

頭の中はグチャグチャで、あれこれ考えて疑心暗鬼となり、考えすぎて両親や姉も本当は知っているのではないかと怪しく思えてきてしまう。知らないのは私だけ……と考えるようになってしまった。いよいよ重症だ。

テーブルの天板にもう一度額をこすりつけ、目を閉じて家族の顔を思い出す。それから目を開けて、天井を仰ぎ見る。それを何度も繰り返す。ジツとしていられない、落着かない。

「私は、誰を信じればいいの？」

そう独り言ちた。自分の問いへの答えはすでに出ている。味方などいない。誰も信じられない、もう誰も信じない。

「許さない」

その思っだけが、私の胸の中でくすぶる。

美しくも可愛い、愛する妹。私に笑いかける、屈託のない瞳を思い出す。その瞳が徐々に濁りを帯びる。瞳の光がくすみ、細くなり、唇は醜く歪む。

記憶の中の妹がどんどん薄汚れていく。



愛しているはずの妹の存在は別の存在へ変わり果てた。人の婚約者を寝取る、醜い異形の存在に変貌したのだ。

そう思った瞬間、私の中で静かに怒りがフツフツと沸き上がり、炎となつて燃え上がる。「そう、私は怒っているの、憎んでいるの」

その勢いは増すばかり。怒りの火種が次々に投じられ、地獄の業火ごうかよりも熱い炎が私の心を燃やし続ける。

「許さない、絶対に許さない」

私の心を踏みにじったバジル様とエリシラに、相応の罰をくだしてやりたい。

「必ず復讐ふくしゅうしてやるわ……」

私を陰で馬鹿にし嘲笑った二人をけつして許しはしない。報いを受けさせてやると、私は誓いを立てた。

誓った瞬間、笑みが私の顔を支配する。結婚して初めて笑った。それはきつと誰かが見れば、恐怖し青ざめたことだろう。

だが今部屋には私一人きりで、見る者はいない。だから私は黒く禍々まがまがしい笑みを、遠慮なく浮かべる。

いつかくる復讐のときまで、私は静かに怒りを燃やし続けるのだ。

第二章 絶望の里帰り

「おかえりなさい、アルビナお姉様！ ……あ、もうアルビナお姉様の家はここではないのね。いらつしやい……かしら？」

「ただいまエリシラ。ふふ、私にとってはここも帰る場所であつてほしいわね」

ニコリと微笑んで答えると、パアツと満面の笑みを浮かべるのは私の三歳下の妹、エリシラだ。

結婚して一ヶ月が過ぎ、一度里帰りを……と帰郷してきた私を、お母様とエリシラが笑顔で出迎えてくれた。

お母様は「おいしいお菓子があるのよ」と言つて、いそいそとお茶の用意をしに行く。傍から見れば、侯爵夫人が直々に？ と思うかもしれないが、お母様が淹いれてくれるお茶はメイドたちには悪いけれど、本当においしいのだ。

五歳上の兄に、三歳上の姉。そして三歳下の妹。仲睦まじい両親のもと、私たち四人兄妹は仲よく暮らしてきた。

ブラッドお兄様はすでに結婚して別邸で暮らしているが、侯爵家の後継としてお父様から仕事を教わるため毎日来ている。今日は朝からお父様とともに登城していて今は不在。会えるのは昼頃だろうか。

兄の妻である、義理の姉は優しくて素敵な人で会いたかったけれど、初産に向けて里帰り中だった。

リーリアお姉様も結婚して家を出ているため、実家に住んでるのは両親を除いては妹のエリシラのみとなった。姉も私の里帰りに合わせて、今日里帰りするらしい。それもまた昼頃の到着と思われる。

なので、今はエリシラと二人きり。毎日同じ屋敷で過ごしていたけれど、一ヶ月ぶりに会うエリシラは相も変わらず美しい。いいえ、その輝きは増しているように思える。紫紺の髪に瞳は妖しげで、けれど無邪気な光が浮かんでるせいでそうは思わせず、十九歳に成長した彼女は、今なお幼さも併せ持つ。けれどきつともうすぐ可愛いという言葉を誰も思い浮かべなくなるだろう。

お母様もリーリアお姉様も美しい人たちだが、エリシラはそれとは少し異なる美しさだ。

妖艶だと、そう言ったのは誰だったか。心の中でとぼけて、私は目の前の妹を見た。

「エリシラはまた綺麗になったわね」

「え、そうでしょうか？　なんだか照れます……」

私の褒め言葉にボツと頬を赤らめるエリシラ。その初心な反応にクスリと笑って、私はそうよとわずいた。

「本当に綺麗になったわ。これではランディも心配でしょうね」

「そ、そんなこと……！」

エリシラと恋仲である、侯爵家の令息、ランディ。二人が正式に婚約して半年が過ぎたが、幼いころから仲がよかった彼らは、さらに仲睦まじい時間を過ごしていると聞く。実際、私が実家にいたころはそんな光景をよく目にした。

ランディは金髪碧眼で整った顔立ちだ。やや幼さが残るものの、二十歳を目前にし徐々に精悍さが増してきた。とても立派な青年に成長している。

エリシラとランディ、二人は文句なしにお似合いだ。

「ランディとは仲よくしているの？」

「ええ、もちろんですわ」

即答するエリシラに私は笑顔を返す。

「お母様がお茶を用意してくれる前に、一度部屋で着替えるわね」

そう言ってエリシラと別れた。

二十二年間住んだ、懐かしい侯爵家の屋敷。迷うはずもなく、一直線にかつての自分の部屋に行く。そこは主である私がいなくなつても、綺麗に掃除がなされていた。嫁入りで少し物が減つたとはいえ、以前とほぼ変わらない部屋の様子にホッと小さく息をつく。

「やはりここは落ち着くわ」

実家でかしまった格好など息がつまるだけと、私はクローゼットの中から服を取り出した。嫁入り時にすべての服を持っていたから、これはお母様が新しく用意してくれたのだろう。いつでも帰ってきていいのよと言ってもらえているようで、うれしくなる。それはたしかに私の好みを把握しているデザインだった。

だが、と寝台に顔を向けて目を細めた。別になんの変哲もないそこを私は睨むように見る。

その天蓋付きのベッドは、エリシラの部屋にあるものと色違いなのだ。彼女は薄いピンクで、私は薄い水色を基調としている。

エリシラの部屋の寝台を思い出してしまふ自分のベッドを睨み、思わずフカフカの寝具を殴りつけそうになる。

しかし、そんな行為になんの意味があろう。そんな小さなことをするために、ここに来たのではない。決意を深めるために私は来たのだ。ギリと唇を噛み、グッと拳を握りしめる。

寝台を一瞥したあと、私はパパッと着替える。着替えを言い訳として部屋に戻ったので、あまり長居をしていたら変に思われてしまう。

天気の良い日は中庭でお茶会するのが実家での習慣となっていて、私は早速向かった。行けばすでにお母様がおり、エリシラも当然のようにいた。お母様の手伝いをしていようだ。

二人は楽し気に会話し笑いながら、カップやお茶菓子を並べている。

こういった、貴族なのに気取らない家族が好きだった。平和で幸せなひとときだといつも思っていた。なのに今は素直にこの状況を喜べない。本来なら楽しい里帰りも、なんだかとても虚しかった。

だが、何も知らない（そう思いたい）お母様に暗い顔を見せたくはなかった。

「私も手伝います」

私はそっと近づいてお母様に声をかけた。

「あらアルピナ、ありがとう。でも大丈夫よ、ちょうど用意ができたところだから。ほ

ら座つて。お茶を飲みながら、いろいろお話を聞かせてちょうだいな」

「はい、お母様」

「私も聞きたいですわアルビナお姉様。バジル様とは楽しく過ごされていますか？」

「……ええ」

即答できなかった。私の頭の中にいろいろな考えが渦巻いたからだ。

仲よくどころか、その逆だった。その状況の元凶となったのは目の前の妹。いったい、妹は何を考えてそんな質問をするのか？

——もしかしたら。本当にもしかしたら、だが。

バジル様の言葉は嘘なのかもしれない。いえ、エリシラを愛していると云ったバジル様の顔は、目はたしかに熱を帯びていた。あれは恋する者の目だ。

なぜわかるのか？

それはエリシラが、婚約者のランディといるときの目がそうだから。お母様がお父様を見つめる目も、リーリアお姉様が夫である義兄を見るときも、義姉がブラッドお兄様を見る目と同じ。

みんな、愛し合っている。幸せな恋愛をしている。

違うのは……私とバジル様だけ。バジル様が愛しているのは、たしかにエリシラなのだ。

だが、関係を持ったというのが嘘だったら？ それとも、エリシラを慕うあまりの妄想？

そうであればいい。そうであるなら少なくとも私は、エリシラを今まで通りに愛し続けることができる。大切な妹として可愛がれる。

そう、思った。

だがそうでないことを理解した。悟ってしまった。

どうしてそんなことを問うのか？ と思って妹の顔を覗き込むように見た瞬間、わかってしまったのだ。家族だから、彼女が生まれたときからそばにいたから気づいてしまったのだ。

『バジル様とは楽しく過ごされていますか？』

そう質問したとき、エリシラの目は悠然と語っていたのだ。

自分のほうが愛されていると。いや、バジル様の愛はすべて自分のものだ。お前などまったく愛されていない、形だけの夫婦だ、と。

見下し、優越感に満ちた光を私はその瞳の奥にハッキリと見た。見えてしまった。

「アルビナお姉様？」

その光を見出し、呆然とする。しばらくは呼ばれていることにすら気づけなかった。

怪訝な顔で私の顔を覗き込んでくるエリシラの顔を目にして、ようやく我に返る。ハッとなつて顔を上げると、エリシラとお母様が不思議そうに私を見ていた。

「あ……ごめんなさい。なんだったかしら？」

「いえ、何度お呼びしても反応がないので……。アルビナお姉様、どうかなさったのですか？ 顔色があまりよくないようですが」

「いえ、大丈夫よ。少し寝不足で疲れているのかも」

本当に寝不足なので、真実の混ざった適当な言い訳。言つた直後に後悔する。

「あらあら。バジル様が寝かせてくれないのかしら？」

口に手を当て、フフ、と笑うお母様に悪気はないのだろう。世間一般の新婚のイメー
ジから、勝手に推測しただけなのだろうが、それは私の心に剣をつき刺すのと同じ行為だ。
言葉を失う私を、再びエリシラが覗き込んできた。

「アルビナお姉様、本当に大丈夫？」

その瞳の奥で何を考えているのだろうか。私を心配するような光をたたえながら、あなたは何を……

耐えられなくなった私は、思わずエリシラを問い詰めそうになった。しかし、問い詰めたところでなんら成果は得られないだろう。むしろ妹の警戒心を煽るだけ。

短慮な行為は自分の首を絞める。復讐を誓いながらも、それらすべてを捨てて詰問する行為は自滅に等しい。

わかっていても、どうにもできないときは存在するのだ。私はそれほど達観できないし、賢明でもない。自分でもわかるほど愚かな女なのだ。

先のことを考えず、心を制御できずに口を開きかけた、まさにそのときだった。

「こんにちは」

第三者の声がしたのは。

その介入によって、私の自滅行為は実行されることはなかった。我に返った私はホッと小さく息を吐き、そして聞きなれた声に振り向く。そこには……

「ランディ！ いらっしゃい！」

立ち上がったエリシラがパアッと顔を輝かせて駆け寄り、すぐに腕を絡ませた相手。

それは彼女の婚約者である侯爵の一人息子、ランディ。

そして、さらにその背後にたたずむ存在に私は目を見開く。

「まあ、バジルお義兄様！」

エリシラが彼の名前を呼ぶ。私は呆然としたままフラフラと立ち上がった。

どうして？ どうして彼がここにいるの？

黒い前髪をかきあげてたたずむその人。私の形だけの夫が、微笑みながらそこに立っていたのだ。

「バジル様？」

バジル様は私の問いかけにチラリと視線を一瞬投げ、すぐにそれをお母様へ向ける。

「突然の訪問、申し訳ありません」

そう言ってバジル様は頭を下げる。その顔が上がった直後、彼は視線を向けた。

私ではない。私の隣にいる仲睦まじいカップルへ向けたのだ。正確にはランディに寄り添うエリシラへ。

どうして気づかなかったのだろう。なぜこんなに明確な行為に私は気づかずいたのだろうか。

そのあとバジル様はけっして私を見なかった。いや、彼は誰も見ない。見ているように見えていないのだ。

その視線はたった一人に向けられている。

気づいてしまえば、意識して見ていればすぐにわかる。バジル様は、お父様とブラッドお兄様が帰宅しても、リーリアお姉様がやってきても、ずっとエリシラを見続けた。

全員が揃ったところで昼食になった。食事をとりながら、バジル様はもう一度、突然

の訪問の謝罪をして頭を下げた。

「いえいえ、気にしないでくださいな、うれしいですわ。でもどうかされたのですか？」

微笑みながら言うお母様に、バジル様は苦笑を浮かべて……私を見て話す。形だけというのに、私に向けられる視線に苦しくなる。

そんな私の苦しみなど気づかぬふうにはバジル様は微笑む。

「ほんの数日の里帰りだというのに……わずか数時間で寂しくなってしまう。アルビナに会いたくてつい来てしまいました」

「……!!」

あらまあ……と笑う両親兄弟。

だが私は心の中で叫んだ。嘘よ！と。

バジル様が私に会いたくて来るわけがない。けれど合点^{がてん}がいく。私の名前の箇所を『エリシラ』に変換したなら……それこそがバジル様の本心なのだと理解できた。

だって彼は私を見ているように見えていない。その目は私の奥、私の隣に座る存在を見ている。

「まあ、アルビナお姉様ったら愛されてますのね！」

そう言って、右隣が存在……エリシラは私の顔を見た。その目もまた私を見ているよ

うで私の左隣の人物に向いている。

そのことは当人たちを除けば、私にしかわからないに違いない。婚前からこうして食事をともにすることはあったから、きつと気づかなかっただけでこれまでも頻繁にあったのだろう。

食欲などわくはずがない。楽しいと思えるはずもない。ここはもはや地獄だ。

私は食事を止めてナプキンで口元を拭ってから、バジル様を見る。

「バジル様」

「ん？　なんだ？」

「お仕事がお忙しい中、会いにきていただいてありがとうございます。昼食後、屋敷へお戻りになるのですか？」

これは確認ではない。私の言葉の裏は『早く帰ってください』だ。バジル様にその意図が通じると思っ、あえて私は聞いた。

しかし彼は首を横に振ったのだ。

「いや、今日はキミと一緒にいたくて、仕事はすべて終わらせてきた。明日帰ることにするよ」

「……そう、ですか」

嫌でもわかる。彼が何をしに来たのか。どうしようとしているのか。私の両隣に座る彼らが今夜、何をしようとしているのか。

私はこの目で確かめることを決意した。

みんなが寝静まった深夜。今宵は新月で月明かりもない。暗闇の中、私はそっと部屋を出てエリシラの部屋へ向かった。

さすがに夫婦で別室は怪しまれると思ったのか、バジル様は私と同じ部屋で寝ることを断らなかつた。

だが寝台にともに入らず、彼は据え置きソファで寝ると言っ、そこで早々に横になつてた。そして、深夜、私が寝ていると思つた彼は部屋を抜け出してエリシラの部屋に向かう。

あんな告白をされたとしても私は大人しく寝ていると、きつとそう思つたのだろう。どこまでも従順で、彼の邪魔をしないと考へていたのだろう。

あまりにも馬鹿にしている。そこまでされて行動しないほど私は愚か者ではない。

「……」

エリシラの部屋の前にたどり着く。